

【取材レポート】生成AI時代の言語教育を拓く—九州工業大学と立命館大学PEP教員による実践報告・意見交換会をOICで開催

2026年2月19日、立命館大学 大阪いばらきキャンパス（OIC）にて、九州工業大学の教員一行を迎え、本学「プロジェクト発信型英語プログラム（PEP）」教員団との意見交換会が行われました。次年度からの新カリキュラム導入を控える九州工業大学と、長年ICT・AI活用を牽引してきた本学PEP。両校の熱い対話から見えてきた、テクノロジーと人間が共生する次世代教育の姿をレポートします。

交流の背景：多文化共生社会の実現に向けたICT活用視察

本視察は、九州工業大学が導入を進める多文化共修科目群や、留学生と地域社会との交流を促進するための言語バリアフリー化の取り組みの一環として実施されました。多文化共修とは、多文化共生社会を背景として、日本人学生と留学生など、言語や文化社会的背景の異なる人々の学び合いを通して、相互理解や多様な視点を育む教育的取り組みを指します。九州工業大学の教員からは、「AIや自動翻訳といったICTツールを学生の学びを深めるために授業へ効果的に組み込むための先進的な事例や知見を得たい」という強い要望がありました。まず、山中司教授よりPEPの概要について説明があり、情報発信にBYODやICTを活用するという基本理念が共有されました。



山中教授（左）と九州工業大学の先生方（奥）

1. 導入の背景：教育の「革命」を支える信念と哲学

生命科学部の木村修平教授が、PEPへのICT導入の歩みと、その根底にある教育哲学について語りました。約18年前に始まったPEPは、「教科書不使用」「ICTのフル活用」という斬新な方針により、当初は学内で強い反発に直面した経緯を振り返りました。

木村教授は、英語力を単なる「生身の語学力」としてではなく、「テクノロジーによって増幅される汎用的技能（トランスファラブル・スキル）」として再定義しました。既存の教育パラダイムに挑戦し、学生を「研究者の卵」として尊重し、自由にツールを使いこなせる環境を整備したことが、現在のAI活用へのスムーズな移行を可能にしたと述べました。



中央奥で経緯を説明する木村先生と九州工業大学の先生方（手前）

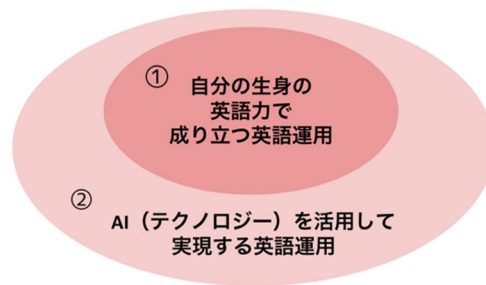
「英語教育を仕事にするのではなく、英語を通じた探究を支える」という革命的な姿勢と、批判を恐れない強い信念が、PEPの揺るぎない基盤を築いていることが示されました。

2. 授業実践：AIを「対話の足場」にする具体的な技法

続いて、薬学部の後藤秀貴講師が、具体的なAI活用方法（プラクティス）を紹介しました。後藤講師は、英語力を「基礎的な言語能力」と「テクノロジーを含めた総合的なパフォーマンス」という二重の円で表現し、AIを活用することでこの「総合的なパフォーマンス」の側面をいかに拡大していくかという視点を提示しました。

PEPでは、AIなどのテクノロジー活用を前提としつつ、学生が直面するハルシネーション（もっともらしい誤情報）などのリスクを最小限に抑えながら、学習効果を最大化する方法を教員間で模索しています。具体的には、教員間でSlackを利用し、「このプロンプトが有効だった」「Miro（オンラインホワイトボード）で議論が可視化できる」といった具体的

なTipsをリアルタイムで共有することで、チームとして教育の質を継続的に向上させていることが報告されました。



- PEPの考える英語力は、どちらかといえば②の範囲まで広く捉えたもの
 - 今後の実社会では②がますます重要になると考えられる
※ただし、①の力や教育が不要になる・軽視されることは今後もないと考えられる
→AIを使うための基礎となる英語力
- 「AIで拡張できる能力」(Augmented Competence) (水本, 2025, p. 145)
「AI拡張的能力」(AI-augmented capacity) (柳瀬, 2023, p. 10)

後藤先生のスライドより：「PEPの考える英語力」

これは、英語教育であっても機械翻訳やAIを一律に禁止するのではなく、新しい4技能（聞く・話す・読む・書くに加え、AI活用能力などを含むと解釈できる）をいかに伸ばすかに焦点を当てるというPEPの教育理念を明確に示しています。

3. 学生の変容：誇りと責任を伴う「自分の言葉」への昇華

薬学部の近藤雪絵教授は、AIや翻訳機を主体的に活用する学生の具体例を紹介しました。教授の授業では、AIが生成した文章をそのまま使用するのではなく、専門知識や「思い入れ」を加え、推敲する過程を重視しています。

具体的な事例としては、まず、アーティスト記事の翻訳において、AIによる無機質な訳を、学生がファンとしての視点を取り入れ、「support (支援する)」を「cheer (エールを送る)」という表現に書き換えた事例が挙げられました。次に、新薬に関する報道記事の事例では、薬学の専門知識に基づき、AIの翻訳を修正し、読者への配慮が行き届いた表現へと価値を高めた事例を紹介しました。



AIが作成した文章のリライトの事例を共有し、学生の持つ「誇り」について説明する近藤先生（右奥）

近藤教授は、「自分の選んだテーマに誇り（Pride）と責任（Responsibility）を持つことこそ、AI時代に求められる真のリテラシーである」と述べました。

4. 指針の策定：ポジティブな規範としてのガイドライン

言語教育センターの井上拓也 外国語嘱託講師は、PEP独自のAI活用ガイドライン策定の背景と理念を説明しました。

このガイドラインは、一般的な「禁止事項」中心の構成とは異なり、「可能性を広げるための羅針盤」としての役割を重視しています。当初の制限的な草案から、PEP教員間の議論を経て、「テクノロジーを思考のブースターにする」というPEPの根幹理念に基づき、ポジティブな行動指針へと方向転換しました。

井上講師は、アカデミック・インテグリティ（学問的誠実さ）を基盤としつつ、AIと創造的に共生する方法を探求すべきだと強調します。本ガイドラインの核心は、固定的なルールを押し付けることなく、進化し続けるAIに合わせて継続的な議論の「場」を維持することにあると述べました。

結びに：二大学の交流が示す「教育の未来」への確信

今回の交流を通じ、九州工業大学の教員の方々からは、「自分たちの教育手法が時代に合っているか不安があったが、今日の意見交換で新しい時代の教育のあり方に確信を持てた」と



いう前向きな声が聞かれました。

この日の意見交換会は、単なる視察という枠を超え、これからの大学教育が目指すべき本質を共有し、学生の成長を支える「チーム」として、また「伴走者」として、教員一人ひとりの役割を再考するための貴重な機会となりました。

強く印象に残ったのは、教員の方々が「英語教育」という専門分野に留まらず、学生が社会で力強く生き抜くための能力と、世界的な研究者として飛躍するための資質を育もうとする、真摯な情熱でした。立命館大学PEPと九州工業大学の今回の交流は、教育の本質を見つめ直し、真剣に議論を交わす教員双方にとって、大きな活力源となったと感じました。



(取材・文・写真：言語教育センター 井上拓也)